教　育　研　究　業　績

氏名　　寺田　清美

学位：　文化科学修士

研究分野	研究内容のキーワード
社会科学	教育学　社会教育学　保育学

主要担当授業科目	乳児保育　幼児理解の理論及び方法　課題研究 AB　教職実践演習　保育実習

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
①　具体例を理論と結びつける授業の展開（パワーポイントを活用）	平成 16 年 4 月～現在	保育の実情や子どもたちの様子を入学当初の学生たちは理解でき難い状態である。そのため、保育内容や意義を子どもたちや保育の実際の姿（現場での具体例）に置き換えながらの授業展開を試みている。そうすることで、学生の興味を引き出し、イメージアップを図ることも可能になる。パワーポイントや映像を活用し、現場で展開される保育内容を、より身近な子どもや保育者の姿として理解するアクティブラーニング的効果を挙げている。
②　ロールプレイを取り入れた授業の展開	平成 16 年 4 月～現在	子どもや母親との対応から生じる諸問題､それゆえに留意すべき対応・言動などの基本を学習後、保育実習前と後に一定の場面を設定してロールプレイを試みる。保育者と子ども、保育者と母親などの役割を演ずることで､互いに相手の立場に立つことの難しさや必要性を実感し､自らの感性や表現能力を高めようとする意欲につながっている。
③　個別指導の重視	平成 16 年 4 月～現在	学生の個人差は学力の面だけでなく、精神面でも開きが大きい。そのため､授業時間外に学生と話し合える場を出来る限り多く持つよう心がけ､個々の状態を把握しながら学習への動機付けや意欲につなげるよう心がけている。更に、実習前と後では自分自身の考えの違いに気付くことを大切に育成している。
2　作成した教科書，教材		
①　実習日誌の書き方	平成 16 年 5 月平成 30 年 4 月改定	共著　萌文書林（全 216 頁） （全体概要） 実習生のために「実習日誌とはどういうものか」「何をポイントに絞って書くのか」「実習の深まりに応じて書く内容はどのように変化するのか｣等ということの実例を活用して具体的に解説した保育者のための専門書。 （担当部分概要）1 章-3 章 pp57-140，6 章 p199，pp206-212 実習日誌とは何かという基本論を解説し、更に実習日誌の実例を通して、何をどのように書くのかを具体的に論じている。学び手のニーズに沿う教材提供として｢保育実習指導｣や｢乳児保育Ⅱ｣に活用出来ると自負している。担当部分【PART２】実習日誌の実例検討とまとめ方 1 章～3 章 p57～140･6 章 p 199・p 206～ p 212 （中田カヨ子･相馬和子編著）(共著者　遠藤良江　安斎智子　福山多江子　菅野陽子）(関連授業課目　乳児保育Ⅰ・Ⅱ）
②　０歳児・１歳児・２歳児のための乳児保育	平成 16 年 5 月 平成 24 年 4 月改訂	共著　光生館（全 150 頁） （全体概要） 乳児保育内容の基本的な理解、乳児保育の総合的な理解、乳児保育の実践的理解を図ることを目的とした保育者に向けての専門書。(担当部分概要） 担当部分：第３章「乳児保育」pp35-48 保育が幼児のできる限り家庭に近い保育の中で､現実の生活と遊離することなく､乳幼児自身の興味から出発すべきであり､養護と教育の両面の重要性を解説した。 （編著）巷野悟郎/植松紀子（共著者　佐々木聡子　大木師礎生岡本美智子　小野明美　太田百合子　井桁容子　梅田幸恵　） （関連授業課目　乳児保育Ⅰ・Ⅱ）

③「はじめてみよう幼児のことば遊び 012 歳児」	平成 16 年 4 月 平成 21 年 2 月改訂	単著　鈴木出版（全 110 頁） （全体概要） 乳幼児が“ことば”を獲得し、日本語のしくみに気づくまでの『遊び』と『理論』とを系統的に年齢別に論じている。保育所保育指針解説書に沿って、０，１，２歳児の子どもにとっての言葉は保育者の影響が大であることを解説し言葉かけを中心としての保育者の援助と関わりの具体的な事例を中心に解説している。子どもの姿と保育者の援助を 1 枚の表にして時系列に開設しているため指導案にも活用できるよう論じた。 （関連授業課目　乳児保育Ⅰ・Ⅱ）
④　指導計画法	平成 15 年 4 月 平成 29 年 3 月改訂	共著　北大路書房　（全 152 頁） （全体概要） 幼稚園教育要領・保育所保育指針の改訂、および児童福祉法の改正を踏まえ、幼児の生活や遊びを大事にした保育における指導計画の意義と役割を明らかにするとともに、指導計画作成の留意事項等の解説を通して、よりよい保育実践に必要な指導計画のあり方について論じた。「012 歳児の指導計画」では計画が乳幼児の現実の生活と遊離することなく、乳幼児自身の興味から出発すべきであることや家庭と保育園との連携を重視した保育が展開される大切さを執筆。 小田豊・神長美津子編著者　著者：寺田清美　第 10 章 （担当部分概要）p130～ｐ148 担当部分　012 歳児の指導計画 （共著者　友定啓子　高村慶子　小林紀子　植田明　戒紀久恵　福田洋子　高梨珪子　高柳恭子　）（関連授業課目　幼児理解の理論及び方法　教職実践演習　乳児保育Ⅰ・Ⅱ）
⑤「保育内容・環境」	平成 18 年 4 月 平成 30 年 3 月改訂	共著　同文書院（全 180 頁） （担当部分概要） 第３章　子どもの発達と自然環境 乳幼児は、自然環境とのかかわりを通して計りしれない多くのものを学ぶ。そこで、保育者は乳幼児がいかに自然環境にかかわるか、その視点に立って保育を展開していくことが大切であることを解説する。繰り返し自然環境にかかわるようにすることは、やがて、愛着をもち、変化に気づくようになっていく。筆者が以前保育士として勤務していた東京都内のある保育園３歳児クラスの事例を挙げながら論じた　（関連授業課目　幼児理解の理論及び方法　・教職実践演習　・乳児保育Ⅰ・Ⅱ）
⑥　改訂　乳児保育の基本	平成 19 年 11 月 平成 31 年 6 月改訂	共著　萌文書林（全 264 頁） （全体概要） 「子どもの最善の利益」とは何か。それは、一言で表現すると、「今を十分に生きること、そしてその過程のなかで望ましい未来をつくり出す力を獲得すること」である。 子どもとの生活の第一線で奮闘する保育者や、まさにこれからその現場に身を投じようとする保育を学ぶ学生は、その「子どもの最善の利益」とは何かを日々の具体的な生活のなかで考え、実践し、子どもの生活や育ちに進んで責任をもとうとする人たちである。乳児保育を志す人や現場の保育者と一緒に、乳児の保育を具体的に考えていくことをねらいとして論じた。 阿部和子編著者（共著者　山王堂恵偉子・小山朝子） （関連授業課目　乳児保育 1. Ⅱ）
⑦　保育所保育指針解説書	平成 20 年 3 月	共著　厚生労働省　（フレーベル館） （全体概要） 平成 20 年保育所保育指針は改定、大臣告示され２１年４月より施行される。 改定に当たり、第 1 章 総則、第 2 章 子どもの発達、第 3 章 保育の内容、第 4 章 保育の計画及び評価、第 5 章 健康及び安全 第 6 章 保護者に対する支援、第 7 章 職員の資質向上の各 7 章による展開で児童福祉法の改定と合わせて解説している。特に 6 章の保育所の社会的役割と子育て支援のあり方保護者対応などについて言及した。（関連授業課目　幼児理解の理論及び方法　教職実践演習　乳児保育Ⅰ・Ⅱ）

⑧　社会福祉学習双書「児童家庭福祉論」	平成 21 年 3 月 令和元年 2 月改訂	共著　全国社会福祉協議会　（全 270 頁） （全体概要） 家族援助を学ぶ学生に向けて保育所保育指針の改定の意義や子育て支援の重要性や 2008 年の児童福祉法の改正など最新の動向を盛り込み、子どもと家庭の福祉について学ぶことができるように論じた。養成課程の新カリキュラム「児童・家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度」および多様な職務内容を担うことが期待される保育士養成課程の「児童福祉」に対応した入門的内容である。（網野武博　山縣文治編著者）担当部分　第 6 章　児童家庭福祉の援助の実際　第 4 節　保育所による児童家庭支援 pp202-206，第 7 節　地域子育て支援 pp217-220 保育所における子ども家庭支援と地域子ども子育て支援のあり方について言及した。（関連授業課目　幼児理解の理論及び方法教職実践演習 乳児保育Ⅰ　課題研究Ｂ）
⑨　保育実習まるごとガイド	平成 19 年 2 月 平成 24 年 4 月改訂	監修　小学館　（全体概要）　（全 112 頁） （全体概要） 「新入生スタディガイド」的保育者専門書である。幼稚園や保育所ではどんな生活をしているのか？更に、保育者はどのような仕事をしているのか？・保育者になるためには、何を学び、準備が必要なのか？保育の基本と学生生活の過ごし方を、わかりやすく具体的に解説した。 （関連授業課目　幼児理解の理論及び方法・教職実践演習）
⑩　家庭生活園生活で役立つことば	平成23 年 8 月	共著　東洋館出版　日本国語教育学会　（全 347 頁） （全体概要） ものとのかかわりの実態を通して、環境やもの、保育者の役割を検討。言葉を通して幼児理解を深めるための教師の基礎的な態度を理解すること。乳幼児の育ちと言葉について第 2 章保育所保育指針･幼稚園教育要領が目指すことばの教育について特に保育所保育にみる言葉について各年齢をおって学生や保育者に理解しやすいように発語から完成期言葉遊びにいたるまでを解説した。 共著者：安見克夫、 （関連授業課目　幼児理解の理論及び方法・乳児保育Ⅰ・Ⅱ）
⑪　保育用語辞典 第 6 版	平成 22 年 4 月	共著　ミネルヴァ書房　（全 422 頁） 保育全般にわたる内容を子どもを中心に項目別に紹介している。担当部分として夜間保育・子育て支援・保育指導・保護者支援などについて特に言及した。 （関連授業課目　幼児理解の理論及び方法教職実践演習　乳児保育Ⅰ・Ⅱ） 編者森上史朗　柏女霊峰 （関連授業課目　幼児理解の理論及び方法・乳児保育Ⅰ・Ⅱ）
⑫　家庭支援論	平成 24 年	監修　共著　アイケイコーポレーション　（ 全 141 頁） （全体概要） 2011 年施行の保育士養成課程の改正に基づき家族援助から家庭支援の内容の充実を図った。保育士による家庭支援、特に保育相談支援は、保育の専門性に基づく固有の理念や方法を有する援助行為であるが、現在では保育士が行う家庭支援は大系化の途上にある。いまだ保育領域における「家庭支援」や「保育相談支援」が体系化の途上にあることを踏まえ、近接領域にあるソーシャルワークの技術を援用し、解説した。 （関連授業課目　教職実践演習　乳児保育Ⅰ・Ⅱ）
⑬　赤ちゃんとふれあおう 1 赤ちゃんの一日	平成 24 年 12 月	単著　　汐文社（全 32 頁） （全体概要） 乳児保育を学ぶ学生や新米の母親が、赤ちゃんの持つ生命力を感じながら丁寧に接していくためのコツや方法など発達を踏まえながら具体的に分かりやすく紹介した。誕生から 1 歳までの発達の表や写真を交えて説明し、生活・遊びを中心に愛着関係を育むことの大切さや育児上の Q&A 等も掲載した。【全国の学校図書館にも設置されている】（関連授業課目　乳児保育Ⅰ・Ⅱ）

⑭ 赤ちゃんとふれあおう 2 赤ちゃんとのふれあい授業	平成 25 年 ３月	単著　　汐文社　（全 32 頁） （全体概要） 赤ちゃんと小・中学生が出会い触れ合うための心構えや準備、環境構成などを写真や図を掲載して、具体的にわかりやすく論じた。赤ちゃんを抱く時には、どのようなことに気をつけると良いのか、 何をすると喜ぶのか、小学校の「赤ちゃんふれあい授業」の場面を解説しながら、子どもたちが命の温かさを学ぶ様子を解説した。赤ちゃんとのふれあい授業に関わる授業担当者、ファシリテーターの教本としても活用出来るように解説した。 （関連授業課目　幼児理解の理論及び方法・課題研究 A.B　ゼミ）
⑮ 赤ちゃんとふれあおう 3 わたしたちが赤ちゃんだったとき	平成 25 年 3 月	単著　　汐文社（全 32 頁） （全体概要） 命を育むことの重要性を自分自身のルーツをたどり、自分史を作成することから伝えた一冊である。母子手帳や赤ちゃんが母親の母体の中で変化する様子や地域連携の重要性などについて事例を挙げながら解説した。具体的には、学生が、お腹の中にいたときの話を保護者等に聞いてみよう。自分が赤ちゃんだったころのことを知り、これまでの成長を振り返る方法等を紹介した。更に、赤ちゃんにやさしい町づくりとはどのようなことなのかについても論じた。（関連授業課目　乳児保育・課題研究 A.B　ゼミ）
⑯ 赤ちゃんの気持ちがわかる本	平成 25 年 12 月	単著　角川中経出版　（全 221 頁） （全体概要） 乳児の動きやしぐさは驚きが沢山ある。モゾモゾした動き、音に反応して目を閉じるなど、赤ちゃん特有の行動にはきちんと訳がある。本書ではそのような動やしぐさの解説とともに、育児の知恵や工夫も紹介している。保育者を目指す学生や初めて子育てをする新米の親にも理解しやすい内容に解説した。 （関連授業課目　乳児保育Ⅱ　課題研究 A.B　ゼミ　）
⑰ 保育用語辞典 第7版	平成 25 年	共著　ミネルヴァ書房　（全 464 頁） 社会的養護に関わる新たな項目を加え保育全般にわたる児童発達支援センター（医療型・福祉型）児童館ガイドライン　社会的養護施設長資格　社会的養護第三者評価の義務化　障害児通所支援　里親支援機関事業　里親委託優先の原則　社会的養護　等新たな項目が加わり特に保育に関する部分を担当言及した。 編者森上史朗　柏女霊峰 （関連授業課目　幼児理解の理論及び方法・乳児保育Ⅰ・Ⅱ）
⑱ 幼保連携型認定こども園・保育要領解説	平成 27 年 2 月	共著　内閣府・文部科学省・厚生労働省/による公式解説書 （全体概要） 公式解説書に社会保障審議会児童部会認定こども園保育専門委員会委員として解説を担当。教育課程・教育及び保育の内容を策定。認定こども園として特に配慮すべき事項.幼児理解の方法を具体的に理解しやすく執筆。(公文書のため抽出不可) 共著者：秋田喜代美、阿部宏行、網野武博、　岩田純、榎沢良彦、岡上直子、柏女霊峰、神長美津子、河邉貴子、吉川由基子、小枝達也、酒井治子、汐見稔幸、志民一成、　柴崎正行、杉原隆、民秋言、寺田清美、野本茂夫、帆足英一、増田まゆみ、無藤隆、矢藤誠慈郎(関連授業課目　乳児保育Ⅰ・幼児理解の理論及び方法)
⑲ 保育用語辞典第 8 版	平成 27 年 4 月	共著　ミネルヴァ書房（全 474 頁） （全体概要）「子ども・子育て関連３法」「施設型給付」「地域型保育給付」「公定価格」「利用者支援事業」など，子ども・子育て支援新制度に係る「保育」の部分を中心に 2010 年の児童福祉法改正に伴う障害児支援関連の項目（2012 年施行）や社会的養護に関わる新たな項目を加え保育全般にわたる疑問にすぐに検索でき授業の中で、法改正、制度の変更なについて理解が深まるように論じた。編者森上史朗　柏女霊峰 （関連授業課目　幼児理解の理論及び方法・乳児保育Ⅰ・Ⅱ）

⑳ 乳児保育Ⅰ・Ⅱ	平成 27 年 12 月平成 31 年 3 月改定	監修　著者　中央法規（全 192 頁） （全体概要） 保育士養成カリキュラムに準拠した内容であり、今後さまざまな場での活躍が期待される乳児保育従事者に必要な知識と技術をわかりやすく論じた。 乳児保育の重要性と課題、0 歳~３歳未満児の保育の内容や方法について、さらなる質の向上を目指す保育者のために専門的に論じた。基本内容を確認しステップ 1~３までを各章ごとに提案し乳児に対する基礎知識から探求する楽しさや重要性につても論じた。監修共著　大方美香　寺田清美（pp：134～144・pp158～168） （関連授業課目乳児保育Ⅰ・Ⅱ　幼児理解の理論及び方法　）
㉑『アッというまに書けて☆伝わる　保育者の伝える力』	平成 28 年 5 月 平成 31 年 1 月改定	単著　メイト（全 111 頁） （全体概要） 連絡帳などの記録の取り方は園によって異なっており、現場に入ってから苦手に思う保育者も少なくない。そこで、保護者に伝えたい内容を効率的に書くためのポイントを１冊にまとめた。連絡帳やおたより、ブログなどの場面に応じて、保護者に受け入れられやすい書き方や写真の選び方などを示している。連絡帳に関しては、伝わる法則を挙げ、書き方のパターンを決めることで書きやすくなると提起するほか、保護者に伝えるべきではないことやＮＧワードなどを紹介し解説した。 （関連授業課目乳児保育Ⅰ・Ⅱ　幼児理解の理論及び方法　　保育者論）
㉒ 家庭訪問保育の理論と実際居宅訪問型保育基礎研修テキスト	平成 29 年 2 月	中央法規　共著（全 267 頁） 子ども・子育て支援新制度において、地域型保育給付の一環として設けられた居宅訪 問型保育事業は、満３歳未満の乳幼児をその居宅で、個別的、家庭的に保育するところ に特徴がある。乳幼児の居宅において保育を行うという新しい保育制度や、個別的に、家庭的に保育をすることの特徴、更には、保育士が居宅訪問型保育に従事するための専門的な内容等について詳しく解説した。共著のため本人担当部分抽出不可能　共著　網野武博　寺田清美　大方美香　（関連授業課目　乳児保育ⅠⅡ　在宅保育　）
㉓. 保育所保育指針解説書	平成 30 年 3 月	厚生労働省　共著　フレーベル館　（全 472 頁） 厚生労働省社会保障審議会児童部会保育専門委員会委員として解説を担当。子どもの発達。特に乳児保育や表現内容を策定。子どもと保育者等との関係の重要性や個々の子どもに応じた援助や受容的・応答的な関わり、子どもの主体性の尊重と自己の育ちおよび学びの芽生えについて論じた。保育者として特に配慮すべき事項. 幼児理解の方法や教職実践者としての対応を具体的に理解しやすく執筆。公式書籍のため担当部分抽出不可能 共著者：秋田喜代美、安達 譲、阿部和子、 大方美香、岡村 宣、木戸啓子、汐見稔幸、清水益治、鈴木みゆき、砂上史子、 堤ちはる、橋本真紀、松井剛太、三代川紀子、村松幹子、山縣文治、和田紀之 （関連授業課目乳児保育 1. 幼児理解の理論及び方法）
㉔. 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説	平成 30 年 3 月	内閣府/文部科学省/厚生労働省共著　フレーベル館（全 496 頁） 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の公式解説書に保育専門委員として解説。子育てを巡る課題の解決を目指す「子ども・子育て支援新. 制度」の一環として創設された幼保連携型認定こども園の教育課程その. 他の教育及び保育の内容を策定したものである。第１章. 総則. 第 1. 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本及び目標. 第 2. 教育及び保育の内容に関する全体的な計画の作成. 第 3. 幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項. 等論じた。 共著者：秋田喜代美 阿部 和子大日向雅美 岡村 宣 神長美津子 汐見 稔幸 鈴木みゆき 砂上史子 田中雅道 橋本真紀 三代川紀子 無藤 隆 山下 文一 横山真貴子 渡邊郁美 渡邉 英則 公式書籍のため担当部分抽出不可能 （関連授業課目　乳児保育 1. 幼児理解の理論及び方法）

㉕ 幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿	平成 30 年 ４月	共著　東洋館出版（全 164 頁） 新しい幼児教育のキーワードである「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、その背景から 10 の姿とはどのようなものかについて解説した。３歳児未満、３歳児、４歳児、５歳児、小学校１年の合計 13 の事例を掲載し、具体的な子どもの成長の様子などから、その姿が見えてくるように論じている。特にこれからの１歳、2 歳の保育の在り方について事例を挙げて解説した。 共著者：　無藤隆　寺田清美（pp14～18） （関連授業課目　乳児保育ＩⅡ　保育実習総論　）
㉖子ども家庭支援論	平成 30 年 8 月	編著：共著　アイ・ケー・コーポレーション（全 144 頁） 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』のカウンセリングの視点から、社会・人格的側面からの幼児理解の基本的視点を与えるものとして愛着理論、自我心理学、社会的学習の理論を解説し、特に治療的理論としてカウンセリング理論や保護者理解をめざした援助の実際について執筆。（pp：57～63, pp72～88, pp133～136）編著者寺田清美・溝口元、田中浩二、小泉左江子、森静子、丸山アヤ子、新開よしみ、 （関連授業課目　子ども家庭支援論　乳児保育 1. Ⅱ　）
３　教育上の能力に関する大学等の評価		特になし
４　実務の経験を有する者についての特記事項	平成 17 年 1 月	熊本教育大学附属幼稚園研修講師
	平成 20 年 ～	改定保育所保育指針解説全国５地域各ブロック研修講師
	平成 21 年 ～現在	初任所長研修講師　（主催　厚生労働省） 初任所長研修講師　（主催日本保育協会　後援　厚生労働省）
	平成 20 年 ～現在	特別区職員新人・および園長研修講師
	平成 26 年 6 月 7 月	日本保育協会保育を高める全国大会講師（山形）保護者支援 北信越地区保育大会講師
	9 月	「幼保連携認定こども園教育・保育要領」 佐賀県幼稚園協会研修講師 保護者支援・幼保連携認定こども園教育・保育要領
	平成 27 年	長崎県佐世保市幼児教育センター「命の授業」講師 埼玉県幼稚園長協会研修講師 愛知県名古屋市保育研修会講師 環境福祉学会「子どもと環境」パネリスト 愛媛県主宰保育研修会講師 内閣府中野区主催「みんなで子育てしやすい街について考えよう」勉強会企画担当、子育て支援ハートフルママ本学学生 18 名も参加、シンポジウムコーディネーター 江戸川区公私立保育所新人研修「記録の書き方・新人としての心構え」(江戸川区文化センター) 東京都社会福祉協議会主催公私立保育園保育者研修大会講師（オリンピック青少年センター）分科会「2 歳児の保育」 ヤクルト 80 周年記念講演講師　（ヤクルトホール） 横浜女子短期大学研修センター講師 　保幼小連携と保育課程　園長研修　保護者支援 渋谷区原宿外苑中学 3 年生 90 名と赤ちゃんとのふれあい授業主宰
	平成 28 年	長崎県保育協議会研修講師（保育計画・記録・評価） 千葉市公私立主任保育士研修　主任保育士の役割 特別区職員新人・および園長研修講師 渋谷区原宿外苑中学 3 年生 100 名と赤ちゃんと母親 20 組のふれあい授業講師
	平成 29 年	環境福祉学会年次大会実行委員長 横浜女子短期大学研修センター講師
	平成 30 年	川崎市幼稚園協会研修会講師 初任所長研修講師（厚労省）東京・大阪

		保育を高める全国大会研修会講師　栃木 保育総合研修会講師（東京・神戸・有馬） 保育研修会講師　記録の仕方・伝える力　（札幌　沖縄　博多） 特別区職員新人・および園長研修講師 キャリアアップ研修講師 埼玉県全域（富山県 6 月 11 月）・10 月秋田県・横浜女子短期大学研修センター11 月・12 月）平成 30 年 1 月川崎市・神奈川県・福島県・２月秋田県横手市・北海道・７月富山県・葛飾区・埼玉県・8 月福島県・大阪市・9 月倉敷市・北九州市・神奈川県） 横浜女子短期大学神奈川県研修センター講師 川崎市研修会講師 渋谷区原宿外苑中学 3 年生 90 名と赤ちゃんと母親 20 組のふれあい授業講師 特別区職員新人・および園長研修講師 横浜女子短期大学神奈川県研修センター講師 川崎市研修会講師 保育を高める全国大会研修会講師　奄美大島 渋谷区原宿外苑中学 3 年生 88 名と赤ちゃんと母親 18 組のふれあい授業講師
	令和元年	キャリアアップ研修講師 埼玉県全域・富山県 6 月 11 月 保育所保育指針改定研修（福岡・神戸・東京） キャリアアップ研修講師 埼玉県・富山県・大田区・神奈川県 研修講師・北区・岐阜県・渋谷区
	令和 2 年	キャリアアップ研修講師 埼玉県・富山県・神奈川県 研修講師・北区・私立子ども園・保育園等
	令和 3 年	キャリアアップ研修講師 富山県・神奈川県・青梅市・東京民間保育連盟 保育所自己評価研修講師　埼玉県 三鷹市保育研究会委員
５　その他 ①　永年勤続者会長賞	平成 10 年	全国社会福祉協議会より永年（20 年）にわたり福祉業務に尽力し貢献した旨の表彰状を受賞
②　厚生労働省第社会保障審議会福祉文化財推薦	平成 17 年 8 月	著書「「あかちゃんが教室にきたよ」が」厚生労働省第 16 回社会保障審議会福祉文化財推薦を受ける
③　　子ども環境学会活動奨励賞	平成 19 年 4 月	「あかちゃんとの触れあい（授業）の重要性」高校生と大学生の視点における子育て（乳児）バリアフリーの活動に-貢献した旨を受賞
④　全国保育士養成協議会会長賞	平成 25 年	長年の保育士養成への関わりが認められ全国保育士養成協議会会長賞を受賞。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概要
幼稚園教諭二級免許状の資格取得保育士資格取得 日本心理学会 認定心理士資格取得 社会福祉士国家資格取得 大学院文化科学部文化科学科専攻博士課程前期修了、修士取得	昭和 53 年 3 月 昭和 53 年 3 月 平成 13 年 8 月 平成 19 年 3 月 平成 21 年 3 月	（昭 53 幼二普 第4861号） (国家資格合格登録番号 86586) （第 2167 号）
２　特許等 特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項	平成 17 年 4 月~平成 18 年 3 月 平成 17 年 9 月 ～平成 18 年 3 月 平成 21 年 4 月~平成 23 年 3 月 平成 23 年 11 月~	北区就学前教員審議会委員副会長 厚生労働省保育所保育指針改定ワーキング委員 品川区保幼小連携推進に関する検討会副委員長 港区指定管理事業選定委員会委員長

	平成 24 年 3 月 平成 24 年 12 月~現在 平成 24 年 5 月~現在 平成 25 年 5 月~平成 27 年 6 月 平成 25 年~平成 27 年 平成 26 年～平成 27 年 3 月 平成 26 年 1 月~現在 平成 27 年~現在 平成 27 年 5 月~平成~現在 平成 27 年 10 月~現在 平成 27 年 11 月~12 月 平成 28 年6月~ 12 月 平成 28 年6月8日 平成 28 年 9 月~平成 29 年 3 月 平成 29 年 3 月~	保育士養成協議会委員 三鷹市社会福祉事業団運営委員会委員長 港区乳児子育てアドバイザー 厚生労働省社会保障審議会委員 幼保連携認定子ども園合同専門委員 中野区こども子育て会議副委員長 中野区基本構想会議委員 富山県子育て支援･少子化対策県民会議基本計画策定部会委員 厚生労働省評価員・提案書技術審査委員 厚生労働省社会保障審議会委員保育専門員（改定保育所保育士指針委員） 中野区こども子育て会議委員長 **保育士等確保対策検討会構成員【厚労省】** 幼保連携認定こども園教育･保育要領改定に関する検討会委員（内閣府） 子ども･子育て支援推進調査研究事業企画評価委員会委員 待機児童数調査に関する検討会委員（厚労省） 東京都子育て支援員研修事業委員会委員
4　その他	平成 14 年 6 月 平成 17 年 4 月 (19 年 3 月まで) 同上 平成 17 年 4 月 (19 年 3 月まで) 平成 18 年 4 月 平成 19 年～平成 27 年 平成 19 年～現在 平成 20 年～23 年 平成 21 年～23 年 平成 21 年～現在 平成 22 年～現在 平成 22 年～24 年	厚生労働省 「年少児童と赤ちゃんとのふれあい事業」企画推進委員 全国幼稚園教育研究協議会理事 文部科学省｢中･高生の育児体験｣支援事業企画推進委員 文部科学省｢2 歳児特区調査研究委員｣独立行政医療福祉法人｢あかちゃんとのふれあい体験｣支援事業企画推進委員 日本経団連　地域振興政策委員 板橋区子育て支援３級養成講座委員 品川区新人保育士公開保育指導委員 保小連携実践事例調査研究委員長 主任保育士の実態調査研究委員長 保育所保育要録を中心とした保小連携推進調査委員長 初任所長研修講師（厚生労働省） 港区・新宿区・豊島区・板橋区・大田区・日本保育士協会･富山県･秋田県･大仙大曲市･保育関係研修講師 東京都地域子育て支援機関研修

	平成 22 年～現在 平成 23 年 編成 24 年～現在 平成 22 年～現在 平成23年11月~24年3月 平成 27 年 6 月~現在 平成 31 年 4 月~現在	東京都社会福祉協議会保育大会講師 板橋区子育て支援 2 級養成講座講師 大田区公開保育指導者 あかちゃんとの触れあい交流ファシリテーター養成講座主宰 査読委員　こども環境学会・環境福祉学会 港区指定管理事業選定委員会委員長 厚生労働省各種選定委員 富山県少子化対策特別委員 中野区保育の質を高めるガイドライン作成委員

１　３　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1.「保育者になる為に」 保育の基本と学生生活の過ごし方	共著	平成 10 年 4 月 平成 23 年 12 月改訂	萌文書林	（全体概要）（224 頁） 保育者になる為の保育の基本と学生生活の過ごし方について保育所保育指針や幼稚園教育要領を提示しながら分かり易く言及した。 担当部分　3 章 pp98~127 中田カヨ子・岡本富郎・相馬和子編著者 共著者 加藤ひとみ・斉藤美代子・菅野陽子・池田藤子
2.「発達 99 号」	単著	平成 16 年 7 月	ミネルヴァ書房	（全体概要） 特集：良質な本の文化を育て、子どもと本の出会いを支えることの意義とその取り組みを多方面から伝えた。 （分担概要） 2000 年子ども読書年、以降大事なことは、子どもと本とのかかわりをつぶさにみるまなざしや、子どものために良質の絵本・本の文化を作り出し、本の文化を育て次世代に手渡していこうとする動きである。実際に家庭、保育所、地域で子どもと本との出会いを支え「子どもと本」のあり方を考えていくことをねらいとして、乳幼児の心を育む絵本と保育者との関わりを保育園 2 歳児の事例を挙げながら解説した。pp18～22

3. ようこそ！絵本の世界へとっておきの１冊とめぐりあうためにー年齢別のお薦めの絵本	単著	平成 17 年 10 月	学橙社別冊	（全体概要） 絵本を推薦するための原則は、子どもの発達を踏まえたものでなくてはならない。そこで、子どもの認知発達や言語発達、感情や社会性の発達を踏まえながら年齢別に解説。担当部分 pp80-100　子供の成長に沿った絵本の選び方 誕生前～誕生後 10 ヶ月未満/誕生後 10 ヶ月～/1 歳代/2 歳代/3 歳代/4 歳代/5 歳代/を担当解説した。絵本はことばや文字を教えるものではなく、親子で手をとりあい絵本の世界を共有するものである。絵本のことばはリズミカルで、「声に出して読みたくなるような」美しい響きが体感できるものであることの重要性などを論じた。
4. いのちの絵本　「あかちゃんが教室にきたよ」 （H18 年厚生労働省社会福祉審議会推薦書）	共著	平成 18 年 2 月	岩波書店	（全体概要）（全 32 頁） 子どもたちは、あかちゃんの成長を目のあたりにして、生きることのすばらしさを実感し、自分たちもこのように愛されて育ってきたの だということに気づいていく。この本は、小学校で「あかちゃんとのふれあい」の授業を 1 年間（8 回）継続した様子を紹介した写真絵本である。保育者は地域コーディネーターとして、小学生と赤ちゃん親子そして、地域の協力者をさり気なくつないで行く。赤ちゃんとふれあう体験を通して、あかちゃんを丸ごと受け入れていく気持ちが参加者に育っていく。人と人とのつながりが希薄だといわれる今日、この授業を通じてみんなの心がつながっていくようすが、ほのぼのと伝わってくる。乳児の 1 年間の発達も学べるよう解説した。 共著　文　鈴木良東　　写真　星川ひろ子
5.「個人記録のとり方のコツ＆保育のキーワード３０」	単著	平成 18 年 3 月	小学館 フレッシュ保育者応援 Book	（全体概要） 日常の保育は、週案、日案、連絡帳を書くための蓄積には日頃の観察記録が重要であることを解説した。個人記録のとり方の工夫や、保育後に思い浮かびやすいメモの とり方・目立った動きがなく記録の取りにくい子に対する心がけ・年齢別の発達の違いをどのように意識するかなど、様々な角度より検討を加えた若い保育者向けの参考となるよう試みた。
6.「あかちゃんはせんせい」	単著	平成 18 年 6 月	全国社会福祉協議会出版部 月間福祉	（全体概要） H17 年 6 月　厚生労働省報告では、虐待で亡くなる子どもの４４％が 0 歳児との事、0 歳児の発達や関わり方をあまりに知らずに親になる人達が増えているのが現実。　ふれあい授業は自己肯定の意識を育み、自分も子どもを育てて見たいという気持ちの高まりに繋がることを解説した。また、赤ちゃんの母親が回を重ねる毎に育児の自信に繋がり、この授業を通じて、生徒だけでなく、参加者みんなの 心がつながっていきほのぼのとしてくる。地域をつなぎ、心をつなぐのはあかちゃんであり、多くの学びも運んでくれる正に赤ちゃんは先生であることを論じた。
7. 環境福祉学の理論と実践	共著	平成 18 年 9 月	環境新聞社 pp245-251	（全体概要）（全 253 頁） 環境と福祉は人類にとって最も重要な課題である。持続可能な環境福祉国家を構築す

				るためには、環境福祉の融合を推し進め、普及することが重要。本書は炭谷茂・前環境省事務次官の編著によって環境福祉学を理論的に体系的に述べ、その全体像を示し、具体的な環境福祉実践の事例を紹介。 （担当部分概要）第６章　環境福祉教育 あかちゃんとのふれあい授業の中で「子育てバリアフリー」の調査をしたことにより、地域環境福祉に対して幾つかの改善すべき点が見えてきたことや生徒が乳児の発達や置かれている環境や福祉に興味関心を持ち自主的な活動に繋がる課程を論じた。 編者　炭谷茂（環境省前事務次官） 　共著筆　小池大哲・菅野伸和　山室成樹・花沢義和・工藤定次・永井伸一
8. 保育園は子どもの宇宙だ！トイレが変われば保育も変わる	共著	平成 19 年 5 月	北大路書房	（全体概要）（全 109 頁） トイレ＝きたない，くさい，こわい？従来のイメージを払拭した，きれいな，おもろい，なごめるトイレができた。そのことにより、子どもが変わり、保育者が変わる。このような育ちを促す保育環境づくりのヒントを現場保育士・保育専門家・設計者が縦横に語り、大阪府・おおわだ保育園の公開保育・シンポジウム・研究会の中で絵本の読み聞かせ環境からの重要性を論じた。 無藤 隆・汐見 稔幸監修　岡本 拡子編者
9. 父親準備性を育む活動の広がり	単著	平成 20 年 10 月	世界の児童と母性 p55－58	（全体概要）（全 67 頁） 父親を子育てに巻き込むさまざまな試みの事例を紹介し、行政や企業などがシステムづくりに取り組む必要性と、将来を支える子どもたちには、ふれあい学習体験が必要であることを取り上げ、国のレベルで省庁の枠を超えて継続的な「赤ちゃんとのふれあい授業体験学習」への理解と普及、そして父親が子育てしやすくなるための子育てバリアフリーの整備の必要性を論じた。
10. 社会福祉用語辞典第 7 版	共著	平成 21 年 4 月	ミネルヴァ書房	（全体概要）（全 391 頁） 児童福祉法等の最新の動向に対応した最新情報を記載した。社会福祉の基礎知識をしっかりと定義。はじめて福祉を学ぶ人の参考書、福祉の現場の実践を支える資料として、役立つよう言及。主に保育所関係を担当した。（ 編者 山縣 文治，柏女 霊峰）
11.『事例でわかる！ 保育所保育指針・幼稚園教育要領』	共著	平成 21 年 3 月	第一法規出版	（全体概要）（全 320 頁） 平成 20 年 3 月に告示され、平成 21 年 4 月から実施された「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」の改定(訂)の背景やその内容、ポイントを解説し、それらを具体的に理解できるよう事例を掲載。特に、改定保育所保育指針の解説を第２編の中で。４章の「保育の計画及び評価」の理解と実践について具体的事例をあげながら、分かりやすく言及した。（編者　柏女霊峰・橋本真紀）
12.『幼稚園・保育所の経営課題とその解決』 新保育所保育指針に基づく保育課程の編成と作り方	共著	平成 21 年 4 月	第一法規出版	（全体概要） 改定保育所保育指針の解説を、４章の保育課程の編成と作り方の理解と実践についてポイントをあげながら、分かりやすく言及した。特にＰＤＣＡサイクルについて記録の取り方や評価の仕方等言及した。 （編者　森上史郎）

13　すぐに役立つ!保育の計画・記録・評価―　保育課程から保育所児童保育要録まで	共著	平成 21 年 9 月	フレーベル館	(全 80 頁)担当 具体的事例を保育内容における計画･記録･評価について 普段の記録の生かし方（なぜ普段の記録が大切なのか；役立つ記録を書く５つのポイントなどについて論じた （監修　網野武博　共著者　田中浩二）
14.社会福祉用語辞典第８版	共著	平成 22 年 4 月	ミネルヴァ書房	（全体概要）（全 389 頁） 児童福祉法等の最新の動向に対応した最新情報を記載した。社会福祉の基礎知識をしっかりと定義。はじめて福祉を学ぶ人の参考書、福祉の現場の実践を支える資料として、役立つよう言及。主に子育て支援や保育所関係を担当した。（ 編者 山縣 文治, 柏女 霊峰）
15.赤ちゃんのしぐさと行動のヒミツ事典	単著	平成 26 年 11 月	ベネッセ ひよこくらぶ 11 月号	赤ちゃんのしぐさと行動の秘密について誕生からおおよそ 2 歳までの月齢に応じてその行動や心理状態について解説した。 特に母親からの質問に対して Q&A 形式でも回答した。
16, 0.1 歳からできるイヤイヤ期を受け止めるヒント	単著	平成 28 年 5 月	マガジンハウス　HANAKO	イヤイヤ等の表現を、自分への”反抗”として受けとめるのではなく、大切な我が子の”主張”として受けとめることが最も重要であること。さらに、”その子の思い、願いを大切にして寄り添う心”をもつことが大変重要であることなど解説した
17. 社会福祉用語辞典第９版	共著	平成 25 年 4 月	ミネルヴァ書房	（全体概要）（全 424 頁） 2010 年の児童福祉法改正に伴う障害児支援関連の項目（2012 年施行）や社会的養護に関わる新たな項目を追加。その他法改正、制度の変更にも対応すべく言及。主に保育・子育て支援関連を担当した。 （ 編者 山縣 文治, 柏女 霊峰）
（学術論文） 1.乳幼児の言語養育の環境設定についての考察 ―絵本を媒介として―	単著	平成 12 年 6 月	月刊国語教育研究　№336 P70～71	（全体概要） 保育者が絵本という一環境要素をどのように配慮するか、そのことにより、乳幼児の声がやがて言葉に発展（成長）していく。1・２歳児クラスでの園児と保育者の読み聞かせ場面の事例を下に、保育者がどのように関わるべきかを解説する。また、園児は絵本を読んでもらうここちよさを感じ、味わうものかを考察する
2. 乳幼児の心を育む絵本との関わり	単著	平成 12 年 8 月	日本読書学会論文集　P173～182	（全体概要） 絵本は、子どもが出会う最初の本である。入門期ともいえる 2 歳児の時期に、子ども達は絵本とどのような出会いをし、読んでもらう心地良さをどのように感じるのか保育者の立場から探る。子どもが初めて 1 冊の絵本と出会うときの様子のや、より絵本の楽しさを知り自らも絵本を主体的に選択していく姿を考察し解説する。

3. 蝶が橋渡しした子どもの呟き	単著	平成 14 年 5 月	月刊国語教育研究 №.360 P64～65	（全体概要） 保育園で 1･2 歳児と 2 年間絵本の読み聞かせを充分に受けた３歳児が蝶を大切に飼育し、蝶との会話を楽しみ、個々が自分で感じたことを自分の言葉で表現していく様子や（子どもには見えても、大人には見えないものが沢山ある）事例を通し、子どもたちの心の語りを紹介する。また、この蝶の生き様を語り合うことや子どもの呟きを保育者が繋いでいく中に非常に大切な意味があることを解説する。
4. 絵本読み場面で子どもは何を学んでいるのか―保育園での読み聞かせ場面における子どもの変化	単著	平成 14 年 7 月	第４回　言語科学会論文集 P42	（全体概要） 小さい頃から絵本に親しんできた子どもと、そうでない子どもでは、〞落ち着き〞が違う、というようなことが一般的に言われていたりする。しかし、絵本入門期である１～２歳の子どもへの絵本読み聞かせ場面を分析してみると、まだ注意の切れやすいこの年齢の子どもが絵本とじっくり向き合えるためには、おとなが、子どもがほかのことに気を散らさず１つのものに注意を向けられるような環境を整えること、また、子どもの注意を絵本にひきつけてやるような保育者の方略（働きかけ）をすることが重要であることがわかる。このように、本報告では、絵本を読み聞かせる実践の中で子どもたちはどのように変化していくのか、また、子どもを変化させるような読み聞かせとはどのようなものかについて考察した。
5. ことばの教育から道徳性のあり方を考える	単著	平成 14 年 11 月	月刊国語教育研究 №.367 P78～79	（全体概要） 子どもは全面受容を受けて初めて、快の感情が生まれる。この心地良さの経験がなければ、例えば生後８ヵ月前後に現れる拒否の状態（人見知りの時期）を上手く乗り越えていけない。ところが、この拒否行為を子どもの自然な発達過程だと捉えられずに、接している親の現状が少なくない。子どもの道徳性の芽生えを育むには、アタッチメントが重要であり、保育者自身の言動そのものが、子どもの学びに影響がある。そして、子どもの心の変化に気付き、その内面的状態や言葉（呟き）を他者に伝え、上手くコーディネートし、子育てを支援していくことが大切である。そして、子どもの表面的ではなく内面的な育ちを物語る「ことば」を大切にした保育が求められていること等を考察する。
6. 児童館における子育ち子育て支援研究	共著	平成 15 年 2 月	平成 14 年度厚生労働省児童環境づくり等総合調査研究事業報告書子ども未来財団 P59～73	（全体概要） 全国の児童館の仕事内容には大きなばらつきがある。7 割以上が育児不安を抱えている在宅保育している親子にとり、児童館における子育て子育ち支援は、ニューズが高いものである。そこで全国の児童館職員にアンケート調査を依頼し、先行的活動をしている杉並区や北海道の実態も合わせて調査する。そして、どのような児童館のあり方が求められ、望ましいのかを提案していく。 共同研究者 伊志嶺美津子・櫃田紋子　吉田須美子　橋爪邦子　高橋貴志

7. 年長児童と乳幼児の交流における相互発達と保護者および地域における影響についての調査研究	共著	平成 16 年 3 月	平成 15 年度厚生労働省児童環境づくり等総合調査研究事業報告書子ども未来財団	（全体概要） 平成 14 年度「年長児童が赤ちゃんとふれあう」活動をモデル事業として全国 5 箇所に於いて実践した。平成 15 年度は、その事業の効果を年少児（乳幼児）と年長児童の両者の養護性（他者と養護的・発達理解を踏まえてかかわれる力）の発達、また保護者や地域社会へもたらした効果のアセスメントを行なった。さらにその効果を生み出す為の実践的配慮に必要なことがらを探るため、具体的な調査を実施を行い、この研究によって昨年度実施した事業の意義が確認されるものと考えられ、はじめて実施する事業のもつ意義は重要なものと言えることを論じる。 共同研究者　金田利子、研究員；伊志嶺美津子・大村千恵・高橋真子・田島昌子・櫃田紋子
8. 赤ちゃんと小中高生とのふれあい交流事業（授業）の重要性～スタッフとして現場からの声～	単著	平成 17 年 3 月	東京成徳短期大学紀要 38 号 ｐ45～56	（全体概要） 厚生労働省は 2002 年度、赤ちゃんに対する愛着の感情を育むことや中高生たちにとって、この予備体験が、“育児不安”からもたらされやすいといわれる虐待の予防につながること、などを目的として「赤ちゃんと中高生とのふれあい事業」のモデル事業を始めた。企画推進者の著者がスタッフの立場から分析する。保育現場や地域活動の場で、赤ちゃんと幼児、小、中、高校生とのふれあい活動が、中高生たちに柔らかい変化をもたらす様子からもこの事業の必要性が高いことを考察する。
9. 高校生の視点から見る地域環境における子育て（乳児）バリアフリーの改善点	単著	平成 17 年 9 月	年次大会環境福祉学会論文集 P20～21	（全体概要） 次世代育成支援の視点からも近未来親になる可能性のある高校生が赤ちゃんや親と共に乳母車を押し地域の子育てバリアフリーの実態調査を行った結果について解説する。乳児を持つ保護者はさまざまなバリアを感じている。一方高校生は、関わって見て、初めて気付くことが多い「赤ちゃんとのふれあい授業」を再認識し地域環境の視点から改善点を見つけていく課程を論じた。
10. 自然環境とのかかわりを通して育つ「心の学び」	単著	平成 17 年 12 月	月間国語教育研究 404 p62-63	（全体概要） 保育園乳児クラスで 2 年間絵本の読み聞かせを充分に受けた 3 歳児が蝶を大切に飼育し、蝶との会話を楽しみ、個々が自分で感じたことを自分の言葉で表現していく様子を解説する。更に子どもには見えても、大人には見えないものが沢山り、自然環境との関わりを通じて育成していく乳児保育期の重要性について論じた。
11. 幼稚園における 2 歳児受け入れに関する調査研究	共著	平成 18 年 2 月	文部科学省調査研究 （全国幼稚園教育研究協議会）	（全体概要） 平成 15 年度から 3 歳未満児の幼稚園入園事業が特区認定を受け開始された。17 年 7 月現在 31 園で実施されている。この現状を調査し 2 歳児保育の現状から弊害はないか、現状での課題などをまとめ、受け入れはどうあるべきかを論じた。

12. 中・高生の楽しい育児体験	共著	平成 18 年 3 月	文部科学省委託研究　全国幼稚園教育研究協議会	（全体概要） 全国４地域の幼稚園児と中・高校生との育児体験を事例に基づいた事業結果の報告として解説した。子育て体験を実施する際の考えや方法、実際の展開例、留意事項、参加した中高生の感想や意見、アンケート調査のまとめ等を網羅した。調査の結果、育児体験する際に、幼稚園児だけでなく乳児ともふれあい、乳児期の発達や保育について学ぶことの優位性がみられた。今後、同様の活動が、全国に広がっていくための手がかりとなるよう試みた。
13. あかちゃんとのふれ合い゛がもたらす無限の可能性について	単著	平成 19 年 8 月	月間国語教育研究 N0424 p58-59	（全体概要） あかちゃんとのふれあいが生み出す力とは計り知れない夢と可能性があること。また、あかちゃんと関わる周囲の人との相互の気づきを弾きだすには、保育者のコーディネーターとしての役割は大きいこと、さらに具体的な支援が悩みを抱えた母親の自立につながったケースを事例として掲載しながら保育者の､『何に気づき､何を伝えるのか』の姿勢の重要性について論じた。
14. パブリックトイレにおける子育てバリアフリー　―学生によるアンケート調査より―	共著	平成 19 年 11 月	環境福祉学会論文集	（全体概要） 「家族援助論」の受講生 236 人による現地調査と担当者へのヒアリングによるアンケート調査を東京都、埼玉県、神奈川県地域のパブリックトイレを236箇所調査した。全体としては「オムツ交換台、ベッド」や「ベビーチェア」は 6 割程度の施設が設置しており、「フック、荷物台」は 9 割以上の施設が設置していた。施設ごとの内訳では「飲食店以外の商業施設」の設置状況は8割以上と優れており、「公衆トイレ」などは設置が遅れていることがわかった。「オムツ交換台、ベッド」の設置場所の分析では、女性トイレや障害者用トイレの中に偏っており、男性の利用についてはあまり考慮されていないことが明らかになった。これらの調査から学生の子育て支援へ意識の向上や家族を援助していくことの大切さへの理解の高まりが考察されたことを論じた。 共同研究者　村上ヤチヨ
15. 学生に対する地域子育て環境に関する調査結果の分析	単著	平成 20 年 9 月	保育士養成協議会研究大会	（全体概要） 学生が子連れトイレ利用者に対する設備の現状調査や施設の担当者に聴き取り調査を行なうことによって、調査そのものが啓発活動としての働きをなしたこと。さらに施設管理者の関心を子育てバリアフリー化に向けることができることに気付き、男子学生が自らの経験から「身近な子育て応援団マーク」をデザイン作成した。これらの内容は学生が継続して調査をし、問題を自分のものとしたことによる活動成果といえる。さらに、高校生の時に『あかちゃんとのふれあい授業』を体験した学生は、大学へ進学後も自ら「子育て支援団活動」(駅の階段を上るベビーカーの親を助ける・電車で席を譲る）を実施している率が多い。乳幼児とその母親や父親と一緒に活動し、親のニーズを探る。このような授業での活動

				が子育て支援の理解を深め、将来保育士として、保護者に対する相談援助を行う際の一助となり、さらに入所中の子どもの親・保護者や家庭に限らず、地域の乳幼児を持つ親への育児支援の専門性を深め、一人でも多くの子育てサポーターとして成長することに繋がるのではないかと考察した。
16. 乳幼児における咀嚼力・食品認知力育成に関する実証的研究	単著	平成 20 年 9 月	乳幼児教育学会論文集 ｐ49－62	（全体概要） 子どもの摂食行動を肯定的に受けとめることが重要である時期に規制的な言動で関わることは子どもの摂食観を歪め、養育者との信頼を築くための障壁となる。 ベテラン職員は、若手職員に経験知を具体的に教示すること、マナーよりも楽しく食べるための食環境整備が重要であること、職員と保護者との意識の差異を埋めるためには、所内の意思疎通を図り全職員間の理解及び周知の工夫と、保護者と共に「食を楽しく育む姿勢」の大切さ等を考慮することの必要性を論じた。
17. 新しい幼稚園教育要領保育所保育指針を踏まえた養成校の役割	共著	平成 21 年 3 月	東京成徳短期大学乳幼児教育制度に関する研究グループ	（全体概要） 保幼小連携の実態を調査し、連携推進に対応できる保育者の養成の視点から今後のあり方について言及した。 共著　中田カヨ子、安見克夫、和田信行、松本純子
18. 保小連携実践事例調査研究	共著	平成 21 年 3 月	福祉医療機構助成事業研究	（全体概要） 保幼小連携の実態の中でも特に保育園と小学校の連携は少ないそこで保育園と小学校の実態を全国 8 箇所に焦点をあてて今後の連携のあり方について言及した。 共著和田信行　田中浩二　松嵜洋子他８名
19「保小連携事例集」	共著	平成 22 年 2 月	日本保育協会	（全体概要） 平成 21 年 4 月~平成 12 月までの間、保育園と小学校の連携の実践事例について調査し、実例を全国から 6 事例挙げ、分析するなど、問題と課題の抽出し今後のあり方について論じた。 共著和田信行　田中浩二　松嵜洋子他８名
20. 主任保育士の実態とあり方	共著	平成 23 年 2 月	日本保育士協会	（全体概要） 保育所職員の処遇の向上と保育内容の質の向上、そして、将来あるべき主任保育士像の確立に資することを目的として、主任保育士の実態に関する意識調査研究を実施し今後のあり方について言及した・ 共著　尾木まり　久野順子　廣田智子　小野田晴世　中島好美　　龍田三津子　池脇きん子
21．保育所保育要録を中心とした保小連推進事例集	共著	平成 23 年 2 月	日本保育協会	（全体概要） 調査は全国1750か所の全市町村自治体保育要録担当者を対象に平成22年９月~12月実施。回答自治体968件のデータを元に保育要録を保小連携において効果的に活用している実践等について聞き取り調査実施。その結果61か所から保幼小連携の困難さが表出。その多くは連携したいと考えているが、保幼小それぞれの勤務形態の違いや業務多忙のため、双方の職員が話し合う機会がもてない。温度差がある。さらに学級編成に間に合うように3月上旬に受理したい小学

				校側の希望など保育要録の内容に加えて、実施状況や特色のある活用方法など効果的な保育要録のあり方や課題、今後の改善の方向性について言及した。 共著和田信行　尾木まり　松嵜洋子　田中浩二　　櫛田薫　馬場耕一郎　福島義信
22. 保育所における保育相談支援の実際	単著	平成 23 年 7 月	福祉心理学会第 8 巻第 1 号 pp17－23	「保育相談支援」とは 2012 年に新設された目である。 保育所における保育相談支援は、地域の社会資源、子ども家庭福祉センターを始めとする関係機関との連携・協力のもとに行うことが重要であるが、特に臨床心理士や関係機関との連携の課題の一つとなっている。保育の領域に社会福祉と心理学の両方の視点を積極的に取り込む保育相談支援の実際について、事例を挙げながら呈示した。
23. 保育所保育要録と保小連に関する調査研究	共著	平成 24 年 2 月	日本保育協会	（全体概要）前年度の調査の継続として今回は、自治体ではなく、全国保育所 2284 か所を対象に平成 23 年 8 月 ~ 9 月に実施し、1193 件（回収率 52.3%）の回収を得た。質問紙調査の内容は、保育要録の内容構成や保育要録にかかる保育所および小学校の意識、また、保育要録を保小連携において効果的に活用している実践等について聞き取り調査した。その結果、保育要録の小学校への送付方法は、50.3%が直接手渡し、送付後の小学校との情報交換の有無は、直接手渡しした方が有意であった。更に保育所児童保育要録における実施状況や特色のある活用方法など効果的な保育要録のあり方や課題、今後の改善の方向性について言及した。共著　和田信行　田中浩二　溝口元　松嵜洋子　櫛田薫　馬場耕一郎　福島義信
24 保小連携に関する調査研究報告書	共著	平成 25 年 2 月	日本保育協会	（全体概要） 平成 21 年から毎年継続研究してきた保小連携の調査研究について、まとめた報告書である。 先進的自治体大曲・佐世保・加古川・足立区などに聞き取り調査に出向き今後の連携の在り方について論じた。 共著者　和田信行　小島伸也　栗本広美　馬場耕一郎　福島義信　藤野輝久 小林公正
（その他） 1. 「幼児に対する「しつけ言葉」の研究(5)－保護者のアンケート調査－」	共著	平成 10 年 5 月	日本保育学会第 50 回大会論文集 p716－717	（全体概要） 幼児に対する「しつけ言葉」を保護者のアンケートをもとに，しつけに対する親の意識と子どもの年齢差の有無，子どもの発達と親の意識との関連の検討を目的とした。しつけに対しては，男女児ともに挨拶することを重要視していることや騒ぐことに対して，自宅では寛大だか公衆の場をでは禁止傾向が高いことの検定結果が得られた。 （共著；　安見克夫・村石昭三・関口準一）

2. 2 歳児の絵本の読み聞かせ場面における保育者の思考と行動－環境からの考察―	共著	平成 12 年 5 月	日本保育学会 第 53 回大会論文集 p304－305	（全体概要） 保育園での 2 歳児の絵本の読み書きかせ場面研究を 14 年間継続研究分析した結果，2 歳児の読み聞かせ場面では，集中・非集中がランダムに繰り返される。2 歳児が絵本の世界に，じっくり入り込めるための保育者の読みきかせの配慮の視点について言及した。 （共著；無藤隆）
3. 保育実践における子どもの発達	共著	平成 17 年 3 月	日本発達心理学会 p265	（全体概要） 乳幼児期の子どもの発達はあらゆる側面から研究され知見が積み重ねられている。一方、保育実践は乳幼児期の発達を守り育てる専門的営為である。子どもの発達は具体的な物的、人的環境のなかで行なわれるものであり、保育実践の現場では子どもの発達を見通して環境を構成し、そのなかでさまざまな活動が保育者の援助のもと展開している。しかし、保育の現場で乳幼児を対象として研究データを収集した研究は枚挙にいとまがないとしても、保育実践と関連づけて子どもの発達を捕え、記述することはこれまで十分に行なわれてきていない。このことは、子どもの発達にかかわる保育実践の特質が十分に記述されてこなかったということでもある。そこで本研究では、保育の現場の中で生じる発達や子どもの生活経験の表現、と保育実践とのかかわりから子どもの発達について論じた。 共同研究者　無藤隆：砂上史子
4. 赤ちゃんとのふれあいが生み出す力	単著	平成 19 年 3 月	こども未来財団「こどもみらい」３月号	（全体概要） 「あかちゃんとのふれあい授業」を通じて小学生から中学高校生はもちろん、地域の人たちの心がつながってきている。その様子やふれあいによって生み出されている力とこの授業の意義について解説した。
5. おたより・連絡帳・懇談会	共著	平成 11 年 3 月	小学館 別冊幼児と保育″99 3 月号 （全 98 頁）	（全体概要） 園で必要とされる資料の書き方などをそれぞれの行事に対応した事柄別に解説した。 （担当部分概要）P4～P45 近年は、バス通園や働く母親が増加している故か、保育者が母親と直接会話する機会が減り、プリントなどで必要事項を伝えることが一般的になってきている。 父母とコミュニケーションをはかるための園だより・クラスだよりの作成のポイントを取り上げげた。また、連絡帳の文例などを通して園が家庭に伝えて行くべきもの、母親が知りたいと望んでいることへの応えかたなどを示した。また、懇談会や家庭訪問の必要性と問題点などについても、様々な角度より検討を加えた若い保育者向けの参考となるよう試みた。（監修著者：岡﨑比佐子）（共著者足立喜代子、勝　明、古川伸子）

6. こどもの傍らにいる大人の協働―実践者と研究者の協働	共著	平成 17 年 5 月	日本保育学会第 58 回大会大会準備委員会企画シンポジウム 1 p92～93 （指定討論者）	（全体概要） それぞれ 3 人の専門の異なる立場の研修者が乳幼児の育ちについて論じた。中国と日本の保育の差異から日本の保育の特徴として、依存と過干渉の姿が見えてきたか、といったアジアの育児学からの提言を。更に、児童文学と保育の接点から「実践者と研究者との協働。」とは、まずは、保育者の保育のドキュメンテーションの記録化である。次いで、保育者が研究者と関わることは、自分の主観的な見方になりがちな保育を客観的長期的視野に立てる。その中で実践者は研究者から方向性を見出すきっかけをつかみ。研究者はフィールドからの発見を会得する。端的にいえば、保育と保育学の基礎学を見直し、場合によってはその内容を拡大しなければいけない時代になっているのではないかを論じた。企画者　汐見稔幸　話題提供者榊原洋一　山本登志哉　村中李衣　指定討論者　寺田清美
7. 赤ちゃんとのふれあい交流で何が育つか―	単著	平成 17 年 5 月	日本保育学会第 58 回大会論文集 p434～435	（全体概要） 現代社会の現状として少子高齢化・核家族化が進み、子どもが成長する過程の中で、人の育ちを学ぶ機会が減少し、65％の生徒があかちゃんと触れ合うことがない。そこで、1 年間小学 5 年生の同じクラスに 同じ赤ちゃんと親が授業に参加していく中での様子を主催者の立場から追跡研究すると、参加後はすべての対象において（赤ちゃん・小学生・スタッフ・親）相互理解が読み取れる。更に、小学生からは「赤ちゃんが可愛い」「お母さんは大変」などの意見が聞かれ、共感性の高まりなどが見られたことを論じる。
8. 高校生と大学生の視点における子育て（乳児）バリアフリーの実態	単著	平成 18 年 3 月	東京成徳短期大学紀要 39 号 p13～24	（全体概要） 本研究は、東京成徳大付属高校生と短大寺田ゼミ生が実際に赤ちゃんとその母親と共に、その地域にある公共施設や駅、スーパーマーケット・郵便局・銀行商店街等をベビーカーを押しながら歩くことを通じて、地域環境における子育てバリアフリーの実態を明らかにする。更に、調査による高校生と大学生の意識の違いなども探る。すると高校生より短大生の方が寄り内容を深く考察し自分なりに子育てバリアの改善点を考案している姿が見られる。学生の実態調査から意識変化などを論じる。更に、子どもを産み育てこの街で住み続けて安心という思いが高まるためには、子育てバリア改善も必要であることを論じた。
9.「家族援助論」講義法の一試案－いのちの絵本「あかちゃんが教室に来たよ」, 学生 450 人の読後記録の分析研究から－	単著	平成 19 年 3 月	東京成徳短期大学紀要 40 号 p15～26	（全体概要） 従来の「家族援助」の講義方法で、家族を援助することへの理解が学生にどのくらい浸透しているのであろうか。家族援助論の教授方法とは、家族のあり方について、具体的に踏み込むようにしていかないと理解しにくいのである。家族援助論の授業場面や学生のアンケートの結果を交えながら「家族援助論」講義法の一試案を論じた。

10.「あかちゃんとのふれあい授業」の必要性－命の絵本「あかちゃんが教室に来たよ」, 学生507人の読後記録の分析研究から－	共著	平成19年5月	日本保育学会第60回大会論文集	（全体概要） 「あかちゃんとのふれあい授業」を題材にした『いのちの絵本「赤ちゃんが教室にきたよ」』を教材に用いた授業を取り上げ、この絵本を読むことによる、生命や家族の大切さについての理解や、実際に子育てに積極的に関わりたいという意識の促進に焦点を当てて、考察した。 共同研究者　砂上史子
11. 中学生の保育体験を通した『あかちゃんとのふれあい授業』の考察	単著	平成20年5月	日本保育学会第６１回大会論文集 P795	（全体概要） 現在中学生の保育体験は各地で実施中だが、中学生の職保育体験を通した『あかちゃんとのふれあい授業』においては、体験から生まれた感想や知識は、生きた学習となり、妊娠・出産・子育てについて関心を示す生徒が増え、育児に協力的姿勢が芽生える傾向にあることが考察された。さらに、保育者にも事前学習が必要であり、園児の発達状態や接し方などを生徒に、事前に伝えることができないと、園児との関係をつくり難くなることなどを考察した。
12. 園環境を食と排泄から考える	共著	平成20年5月	日本保育学会第６１回大会論文集p124 企画シンポジウム（企画者）	（全体概要） 園環境を考えるとき、食事の環境や排泄の環境は重要である。食と排泄は発達の大きな柱となっており、それぞれの場面での養育者と子どものやりとりは心身の健全育成にとって重要なものである。乳幼児期に豊かな食や排泄の体験を積み重ねることによって養育者との信頼関係の基礎をつくる。本稿では５人の論者が保育園での食育と食事環境、排泄教育（便育）とトイレ環境についてそれぞれ話題提供をし、保育における食事や排泄がもつ重要な意味、それをサポートする環境について論じた内容を考察した。 共著者鴨下重彦（国立国際医療センター名誉総長）根ケ山光一（早稲田大学）村上ヤチヨ（早稲田大学人（間総合研究センター）馬場耕一郎（社福・友愛福祉会　おおわだ保育園長）
13. 乳幼児期の養護内容について―幼稚園保育所家庭の役割の現状と課題－	共著	平成20年5月	日本保育学会第６１回大会論文集ｐ３３１	（全体概要） 乳幼児期の養護内容について、幼稚園や保育所および家庭の役割の現状をそれぞれの保育者と保護者にアンケートによる調査を実施し、その問題をあげてみた。すると幼稚園の保護者の方が保育所に比べ躾などは家庭でやるべきだか現状はできていない。一方保育所の保護者は、生活習慣の自立に向けて、家庭ではなく保育所への依存傾向が強いことが考察された。また子どもの年齢により担当保育者の意識の差異も見られるため今後検討内容として考察された。 共同研究者　松本純子　中田カヨコ　青木靖　遠藤良江

14. 保育における食育の課題	単著	平成 20 年 11 月	環境福祉学会年次大会論文集	（全体概要） 「危機的な子どもをめぐる環境にいかに対処すべきか」をテーマに、鴨下　重彦　（東京大学名誉教授）小池　百合子（衆議院議員　元環境大臣）炭谷　茂　（恩賜財団済生会理事長、元環境事務次官）らと共に次世代を育む環境福祉について語り、著者は特に保育と食育との関連を環境福祉学的視点から考察した。
15. 「幼保小連携の推進に対応できる保育者の養成」	共著	平成 21 年	東京成徳短期大学プロジェクト研究	（全体概要） 保育所・幼稚園と小学校の連携の実態をアンケート調査し保育者養成の在り方について提案事項を論じた。（調査対象 107 市町村教育委員会）
16. マタニティマークの認知度および意識の変化に関する研究 ―都内短期大学生の調査から―	共著	平成 23 年 3 月	東京成徳短期大学紀要論文第 44 号	東京都内の短期大学保育科の学生を対象として、平成 18年と平成 21年の２回、マタニティマークの認知度や意識に対する調査を行い、第１に、短期大学保育科の学生 がマタニティマークに対してどの程度の認知度を有し、どのような意識を持っているのかを 明らかにし、第２にマタニティマークが導入されてから４年間が経過した時点において、学生の認知度や意識に変化を比較したところマタニティマークに対する認知度や意識の向上があり、必要性や興味についても導入直後の平成18年時点でも高い意識を有していたことが明らかになった
17. 「保幼小連携を接続期の重要性の視点から提案する」	企画者	平成 23 年 5 月	日本保育学会第 64 回大会自主シンポジウム	保幼小連携は、平成21年度より保育所から小学校へ保育所児童保育要録（以後保育要録と示す）が送付されることになり、幼児教育関係者も小学校教育関係者も双方の接続期や伝達のあり方について大きな関心を持ち始めた。 保育要録送付から見えてくることや「要録送付から発展した保小連携の取り組み」などのついて論じた 登壇者　丸山裕美子厚労省保育専門官 馬場耕一郎　和田信行　松嵜洋子　尾木まり　田中浩二
18. 保幼小連携を接続期の重要性の視点から提案するⅡ ―保育所児童保育要録・カリキュラム活用の実態―	企画者	平成 24 年 5 月	日本保育学会第 65 回大会**自主シンポジウム**	（全体概要） 保幼小連携は、永年の課題でありましたが、保育所から小学校への保育所児童保育要録の 2 回目が送付され、連携への期待は高まりつつあります。効果的な保育要録のあり方や課題、今後の改善の方向性を探るにあたり、全国的な実施状況や特色のある活用方法などを収集し調査した結果をふまえ、保育における保育所・幼稚園・小学校との連携や保育要録・接続期カリキュラムがもつ重要な意味、それをサポートする望ましい環境への提言を論じた。 登壇者　丸山裕美子厚労省保育専門官 馬場耕一郎　和田信行　松嵜洋子　櫛田薫
19. 保育者の質の向上における公開保育の役割	単著	平成 24 年 5 月	日本保育学会第 65 回大会論文集ポスター発表	（全体概要） 保育所保育における保育者の質の向上を鑑みた際に、保育の計画と振り返りは重要な項目である。そこで 4 年間継続に調査した公開保育の場面から質の向上について言及した。

20. 大学大学生の「赤ちゃん体験」についての調査と分析 ―「接触体験」と「観察体験」の有効性―	共著	平成 25 年 2 月	東京成徳短期大学紀要論文 46 号	（全体概要） 保育者を目指す養成校学生と他学部（非保育群）の学生とでは、「赤ちゃん体験」に有意な差が見られた。さらに、養成校学生は「赤ちゃん体験」を多く体験した割合が高い。それには非保育群と比べて有意にきょうだいの数が多い生育環境と関係があった。またそのことが保育者を志望する動機にも影響を与えていることが明らかになった。一方、非保育群には「赤ちゃん体験」が少ない男子が多く、親準備性を養うためには「赤ちゃん体験」が有効であること等を論じた。 共同研究者　小泉左江子　田中規子
21. 低年齢児の保育に関する調査研究報告書	共著	平成 25 年 2 月	日本保育協会	分担担当 **５.「低年齢児の保健、安全について」** 今後の低年齢児の保育においては、保育所内での子どもの健康を守り、安全を確保することだけに留まらず、家庭においても子どもの健康や安全を確保する取り組みを、保育所が主体的に行っていくことを論じた。
22.「赤ちゃんとのふれあい交流ファシリテーター養成講座」に関する考察	共著	平成 25 年 5 月	日本保育学会第 66 回大会論文集	（全体概要） 平成 24 年度から中学校学習指導要領の技術・家庭科では、それまで選択履修であった「幼児との触れ合い」活動が必修化された。そこで、学校と赤ちゃんとその母親・学校等をつなぎ、生徒との交流が円滑に進むようサポートする「赤ちゃんとのふれあい交流のファシリテーターの養成」を主宰している立場から今後の方向性について論じた。 共同研究者　掛札逸美　山田麗子
23. 家庭での乳幼児の傷害予防の取り組み～子育て安心カードの開発と活用	共著	平成 25 年 5 月	日本保育学会第 66 回大会論文集	（全体概要） 「子どもの育ちと安全がわかる！子育て安心カード」を通じた保育所保育士等による家庭の安全注意喚起活動は、現場の保育士等によって積極的に受け入れられているようである。カードを活用した保護者支援の在り方などについて論じた。 共同研究者田中浩二　掛札逸美　今井豊彦
24. 赤ちゃんへの語りかけ	単著	平成 25 年	港区わくわく通信	（全体概要） 赤ちゃんのクーイングや変化を見つけながら優しく語りかけることの重要さ、受け止めることからの相乗効果について解説した。0 歳児に相応しい絵本なども紹介した。
25.「ひとりぼっちで悩まないで」	単著	平成 26 年	港区わくわく通信	（全体概要） 0 歳児の母親は、育児不安になる確率が高い。ひとりぼっちで悩まずに、誰かに気持ちを打ち明けて相談し気持ち切り替える方法について具体例を提示しながら論じた。
26.「どうやって 叱(しか)ればいいの？」	単著	平成 27 年 10 月	港区わくわく通信	（全体概要） ２歳児は、何事にも「イヤイヤ」と表現したり、ある時は「わたしがやる」と何でもやりたがったり、一人ではまだまだ未熟なことが多い状態。そのため「テリブル　TWO（ツー）」（魔の２歳児）と表現されるほど扱いにくい時期。この時期をどのように乗り切るか秘策について論じた。

27. 乳幼児への咀嚼力育成と保育者の意識の関係について	共著	平成 28 年 3 月	東京成徳短期大学紀要論文 49 号	（全体概要） 前回 2008 年調査との比較も含めながら、全国 642 園の保育園の保育者を対象にアンケート調査を実施し、乳幼児期や幼児食摂取時期に、離乳食援助や咀嚼力育成のために保育園が親子に対して行っている援助やその効果について論じた。 共同研究者　小泉左江子　小林佳美
28. 赤ちゃんとのふれあい授業による親性準備教育の有効性について	共著	平成 28 年 5 月	日本保育学会第 69 回大会論文集	（全体概要） 本調査は、都内中学 3 年生 90 人初めての赤ちゃんとのふれあい授業の事前・事後に、赤ちゃんに対するイメージアンケート調査を実施した。 中学生が実際に赤ちゃんやその母親とふれあい、育児を模擬体験する学習に基づき中学生の意識がどのように変容するのか、親性準備教育としての有効性について、その特徴を論じた。 共同研究者　小泉左江子　小林佳美 中舘慈子　岩久由香
29. 保育士養成校において在宅保育論を学ぶ意義 ～「保育士+認定ベビーシッター」資格取得者に関して～	共著	平成 28 年 5 月	日本保育学会第 69 回大会論文集	（全体概要） 在宅保育に関する科目を学んだ意義及び上記の資格を取得した人材の活用については現在十分に検討されていない。養成校の学生が「在宅保育論」を学ぶことが保育現場で果たす意義や効果について考察する。 さらに、「認定ベビーシッター」の資格を活用する方法について自治体へのヒアリングを実施した結果を踏まえ在宅保育のもつ様々な可能性検証・周知していく必要性について論じた。 共同研究者　中舘慈子　高辻千恵 岩久由香　小泉左江子
30, 保育所におけるトイレ環境の調査	共著	平成 28 年	常磐短期大学紀要	（全体概要） 保育所のトイレ環境の現状がどのような状態にあるのか、主に関東圏の保育所を対象に網羅的に調査した。更に乳児が使いやすいように、かつ保育者が保育をしやすいように検討してトイレ環境の改修を行った保育所を対象にピンポイント的に調査し、子どもがひとりでトイレに座れるようになる時期の変化を改修前後で比較した。これらの結果からトイレ環境のあり方が子どもの発達に影響を与えている可能性があることについて論じた。 共同研究者　村上八千世
31、赤ちゃんとのふれあい授業における学生ファシリテーターとしての学びについて	単著	平成 30 年 5 月	日本保育学会第 71 回大会論文集　p 507	（全体概要） 保育実習前に「赤ちゃん親子と中学生とのふれあい授業」を経験することは、保育学生にとって「乳児保育」・「対人援助技術」を知る良い機会であった。さらに体験していない学生との比較では、ふれあい授業にファシリテーターとして参加することの多大な影響、効果、とくに親準備性を身につけることの重要性が示唆された。

32. 保育者養成課程のカリキュラム史」研究プロジェクト	共著	平成 30 年 1 月	保育教諭養成課程研究第 4 号	（全体概要） 「保育者の養成課程」の視点から、これまでの幼稚園教員養成課程と保育士（旧保母含む）養成課程の戦後以降のカリキュラムの内容の変遷を整理。幼稚園教諭教員養成の歴史・幼稚園教育要領の改訂内容と改訂のポイント およびその意図・保育士養成課程の歴史・保育所保育指針の改定内容と改定のポイント およびその意図等である。その成果を共有できる方法や幼保一元に向かいつつある時流に よりフィットした保育者養成への活路を見出す内容について論じた。 共同研究者：伊藤理絵、大佐古紀雄、小野順子、村井尚子、山下佳香
33 中学生を対象とした「赤ちゃんふれあい授業」の効果に関する検討	共著	令和元年 5 月	日本保育学会第 72 回大会論文集	（全体概要） 将来父親、母親となる可能性を持つ中学生を対象とした「赤ちゃんふれあい授業」を行うことは、兄弟姉妹の少ない生徒には、より自己を肯定的に受けとめることに有意であること。子どもを心豊かに「ケア」するマインドを高める有意差が認められた。事前事後学習を含めて、5 時間程度であっても 1 回の赤ちゃんとのふれあい授業により赤ちゃんに対する意識や保育マインドは芽生えてきていると論じた。共同研究者　中舘慈子　岩久由香　富山大士
34. 乳児保育の課題Ⅴ「実践記録の活用と研究方法の試案」―ポートフォリオの活用より－乳児保育部会	共著	令和元年 6 月	保育教諭養成課程研究大会論文集	（全体概要） 乳児保育においても、子ども理解に基づいた評価が必須であり、そのための記録は、子どもの成長発達の根拠となり、質の担保、向上に欠かせない。観察を通した記録は、保育において子どもの発達や学びについて包括的にプロセスをアセスメントすることでもあり、構成要素は3点が重要であることを論じた　共同研究者　矢野景子　細井香　野尻裕子　石丸るみ　上垣内伸子　本田由衣　八代陽子　山梨有子　宮里暁美　大方美香
35. 乳児保育の課題Ⅻ「0 歳児保育室のあそび環境に関する現状分析」 ―その１：担当保育者による保育室の自己評価より―	共著	令和元年 6 月	保育教諭養成課程研究大会論文集	（全体概要） 0 歳児の保育室のあそぶ空間やもの、乳児保育の視点について 548 名調査。乳児保育の視点 3 項目はポイントが高い傾向がみられ保育者は限られた空間を個々に応じて設定することの難しさを感じていると事が明らかになった。 共同研究者　野尻裕子　矢野景子　細井香　石丸るみ　上垣内伸子　本田由衣　八代陽子　山梨有子　宮里暁美　大方美香
36. 乳児保育の課題Ⅻ「0歳児保育室のあそび環境に関する現状分析」 ―その２：保育者の経験年数との関係―	共著	令和元年 6 月	保育教諭養成課程研究大会論文集	（全体概要） 0歳児の保育室の環境20項目について自己評価得点をみると、経験年数が長くなるほど高くなる傾向。特に「あそび環境」傾向有、3年未満と、3年以上7年未満の間で、得点の差が大。保育経験が3年未満の保育者は、保育室の環境に対する自己評価が低く、経験年数3年以上になると高くなる傾向がみられた。 共同研究者細井香　野尻裕子　矢野景子　石丸るみ　上垣内伸子　本田由衣　八代陽子　山梨有子　宮里暁美　大方美香

37.保育マインド」の育成に関する研究～「赤ちゃんとのふれあい授業」を通して～	共著	令和元年 9月	養成校協議会報告集 2018年度保育サービス振興基金AMINO基金助成	（全体概要） 保育マインド育成と中学生による「赤ちゃんとのふれあい授業」との関係をビデオ調査アンケート調査により分析し、その効果が数値化した。「赤ちゃんふれあい授業」を中学生対象に行うことは、親性準備性に効果のあることを論じた。事前アンケートでは抵抗のあった生徒も事後アンケートでは6 割の生徒に乳児理解の深まる傾向が見られた。兄弟姉妹の少ない生徒には、より自己を肯定的に受けとめることに有意であることや、子どもを心豊かに養護ケアするマインドを高める有意差が認められた。これらは乳幼児理解につながることの意義を論じた。共同研究者：中館慈子、岩久由香、小泉左江子、田中規子
38. 乳児保育の課題Ⅸ　「実践記録の活用と研究方法の試案」～モノを「みる」姿に着目して～	共著	令和２年２月	お茶の水女子大学こどもフォーラム	（全体概要） 0 歳児Ｄ児のモノを見る姿に保育者が着目し、モノと関わる姿の中に、その子どものアプローチを見出し、価値あるものとして注目し、その意味を保育者が言葉にしていく営みが子どもの「探索」を支えていると思われることを論じた。 共同研究者　宮里暁美　細井香　野尻裕子　矢野景子　石丸るみ　上垣内伸子　本田由衣　八代陽子　山梨有子　　大方美香
39.不適切保育を防ぐための取り組み　－基礎自治体の対応と保育者への啓発－	共著	令和３年３月	東京成徳短期大学紀要第54号（pp29-44）	（全体概要） 本稿では、保育者による「暴行」「傷害」「わいせつ」「暴言」等を「不適切保育」として定義し、不適切保育の予防、対応に関連する法制度の検討から基礎自治体が適切な行政権限を行使し、保育施設運営事業者が適切な職場環境を整えることにより、各園の風通しが良くなり子どもにも保育者にも良い環境に変えることにつながる事や基礎自治体と運営事業者との関係を適切な緊張感のあるものにすることこそ、不適切保育を防ぐための基本的な対策である事を論じた。共同調査のため担当箇所抽出不明（共著者　寺田清美　和泉徹彦）
40. 0歳児実践記録活用の一考察	共著	令和３年５月	日本保育学会第 74 回大会論文集	（全体概要） 0歳児、中でも月齢の低い時期は、保育者との関わりが強く見られるが、やがて「もの」との関わりが増えていく。その「もの」との関わりは、あらかじめ保育者が配慮した環境「場」の設定や保育者の言葉がけや関わりは、0 歳児が自ら身近なものに興味を持ち人に関わろうとする芽生えに大きな効果のあることが実践記録を継続していくことにより明確化されたことを論じた。共同研究者中西千賀子
41.0 歳児、1 歳児、2 歳児の“スゴーイ”からの気づき ～ “じーっと見つめる”ことから ～	共著	令和３年５月	日本保育学会第 74 回大会論文集 シンポジスト指定討論者として登壇	（全体概要） 子どものモノとのかかわり方に着目すると、一つのモノともさまざまな関わりがあり、さらにハイハイや歩行の獲得と共に、モノとの出会う範囲が広がっていく、また、保育者は、子どものもモノとのかかわりを、時間の流れとかかわりの変化、状況、他児との関係、表情といったことから子どもを捉え、保育者は、子どもの姿から「探索」「あこがれ」「夢中」を見出していた。保育者は子どもが探索する姿を共感的に見守り記録している。モノと集中して関わる姿を見守り細かな動きを見逃さず、共に過ごし支える保育者の

				援助が重要であることを論じた。 岡本紀子 神川康子　山口奈津子 折笠明日香 橋場和子 山本宏美 乙部貴幸
42,「一人一人が豊かに育つ乳児保育の在り方」(1)～モノに着目して～	共著	令和４年３月	お茶の水女子大学こどもフォーラム	（全体概要） 乳幼児期は、身近な人やものと関わり様々なことを感じ取る経験を重ねる中で、幼児一人一人の中に学びへ向かう力が育っていく。この大切な育ちの始まりは0歳児の保育の中にあるのではないか、と考えた。保育所保育指針には、乳児保育に関わるねらい及び内容として「身近な環境に自分から関わろうとする」体験、探索活動が大切だとされている。実際の保育の場で乳児とモノがどのように出会い関わっているのかということについて、具体的な姿を通して検討した内容を論じた。共同研究者宮里暁美　細井香　野尻裕子　矢野景子　石丸るみ　上垣内伸子　本田由衣　八代陽子　山梨有子　大方美香
43. 0 歳児保育室のあそび環境に関する現状と課題 _ 0 歳児担当保育士の自己評価を中心に _	共著	令和４年３月	保育者養成教育研究」第６号論文	（全体概要） 0 歳児の保育室のあそぶ空間やもの、乳児保育の視点について調査を実施した。乳児保育の経験年数３年未満と３年以上では保育における認知度・子どもの味方等に大きな違がある傾向がみられ保育者は限られた空間を個々に応じて設定することの難しさを感じていると事が自己評価の結果から明らかになった。 共同研究者　細井香　野尻裕子　矢野景子　石丸るみ　上垣内伸子　本田由衣　八代陽子　山梨有子　宮里暁美　大方美香